



仁賀氏は、アンケート調査を行い臨床研究での産学連携を取り巻く環境やその課題と対策について検討した結果を報告した。その結果、医師の事務作業軽減のための事務局の強化や企業の考える研究テーマにふれあう機会を増やすことの必要性を述べた。桐田氏は、コーディネータの立場からこれまで携わってきた岡山大学での医歯工連携の実例を紹介すると共に、その難しさやコーディネータとしての今後の活動のポイントを紹介された。山口氏は、国立大学に比較して私立大学における産学連携の研究が少ないことを指摘し、今後の研究の必要性を論じた。私立大学は、国立大学に比べ、数、教員数、学生数がおおく、産学連携をこれまで以上に進められるポテンシャルを持っていることから、私立大学の産学連携を活発化するためにも、その研究の必要性を強調した。前波氏は、研究チーム形成プロセスについてエージェントベースモデリングの手法を用いたシミュレーションについて紹介した。また、プロトタイプモデリングであるが、研究チーム成立に及ぼす研究支援体制の影響などの知見が得られており、今後、共同研究情報の伝達、共同研究に参画するインセンティブ、異なる組織形態や規模に応じたマネジメント方法の比較などのシミュレートに利用できるとのことで、今後の研究が期待される。石塚氏は、高知大学、高知県における地域の産学連携について、様々な統計データを用いて現状を把握し、今後の活動の方向性について検討した結果を報告した。結果からは、企業における研究者の増加と育成、企業の研究開発投資が必要であること、学内では若手教員の掘り起こしや学外とのネットワーク組織の活用などを進めていくことを述べた。

本セッションでは様々な観点からの産学連携の実例の紹介や分析結果が照会され、産学連携の多様化が進んでいることを伺わせるセッションとなった。様々な産学連携の活動が活発となり実を結んでいくことを期待したい。

---

事業化・モデル化

山本一枝／株式会社ウェザーコック

6月16日(金)第2日目C会場(13:00~14:30)

本セッションでは、「事業化・モデル化」について6発表が行われ、効果的な地域中小企業支援の経験を踏まえた提案や、製品化の具体的事例、新事業領域の検討・経営戦略立案の事例など、数々の興味深い事例が報告された。亜細亜大学の林は、「東北地域における産学官連携による自動車産業への地域中小企業の参入支援について」と題し、地域中小企業の自動車産業参入支援には、柔軟で強力な産学官支援チームの形成と、広域な地域連携が必要と

なるため、全体俯瞰力とプロデュース機能を有する、同一のPMが長期的に支援を行うことが効果的であるとの報告をした。

農研機構の萱野らは、「果樹品種の特性を生かした6次産業事業化事例」と題し、強い農業の実現と新産業創出を目指した農業の6次産業化に着目し、生食のみならず地域の特徴ある素材を活かした加工性を重視して品種の育成を行っている事例と、製品化された加工食品事例を発表した。

(株)ソフトシーデーシーの桑川らは、「「きらきら星脳活計」の活用方法」と題して、宇都宮大学との共同開発事例を発表した。脳機能障害をスクリーニングできる装置を開発し、健康診断などの検査に活用する為、医療機関と共同で実用化研究を行っている事例の報告をした。

(株)鈴木工芸所・光産業創成大学院大学の鈴木らは、「産学連携が創る新事業領域」と題し、衰退産業の企業経営者が、未来に繋がる新事業領域の検討や、経営戦略の立案を行うために、自ら課題解決の為の研究を行っている事例を発表し、大学の新たな活用法を示した。

鳥取大学の山岸らは、「地域資源（伯州綿）を活かした産学官金連携プロジェクト」と題し、平成27年に産学官金連携で立ち上げたプロジェクトが短期間に発展し、境港市内の事業所等が地域ブランド商品の開発・販売を行っている事例を発表した。衰退していた歴史的な地域資源を基に新たな価値を生み出した経緯は、地域資源の活かし方の参考となる。

宮崎大学の丹生らは、「デジタルホログラフィを用いた塗料乾燥硬化評価装置の製品化」と題し、島根大学・横田教授のシーズから、外部資金を活かして塗装乾燥・硬化評価装置を開発し、(株)東洋精機製作所との連携で、製品化・販売に至った経緯の報告があった。シーズの可能性を広げた研究プロセスが参考となる。

いずれの発表も興味深い内容であったため、活発な議論が行われた。本セッションにおける発表は実務経験から得られたもので、わが国の産学連携のモデルとなる貴重な事例発表である。

---

以上